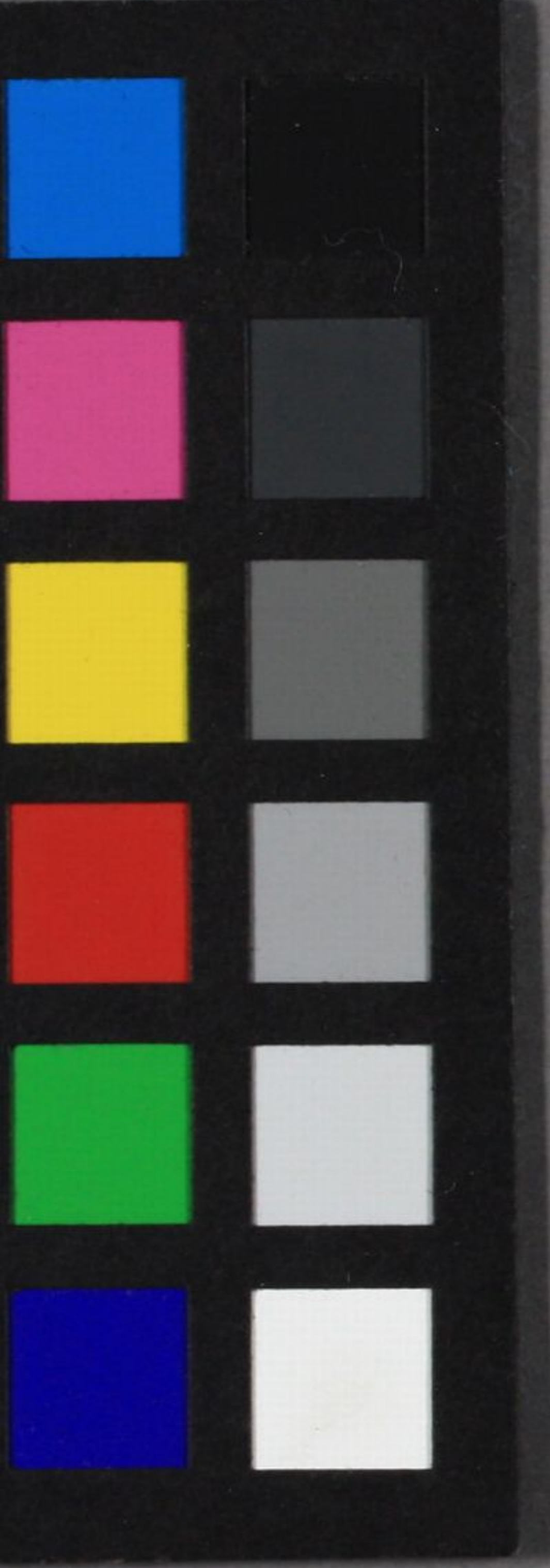


拾遺和歌集

上



拾遺和の集上

西宮のあんらむのむらにふりて

まをさるるふりてふりてふりてふりて

西宮四年中宮のむらにふりて

まをさるるふりてふりてふりてふりて

西宮のあんらむのむらに

まをさるるふりてふりてふりてふりて

西宮のあんらむのむらにふりて

まをさるるふりてふりてふりてふりて

西宮のあんらむのむらに

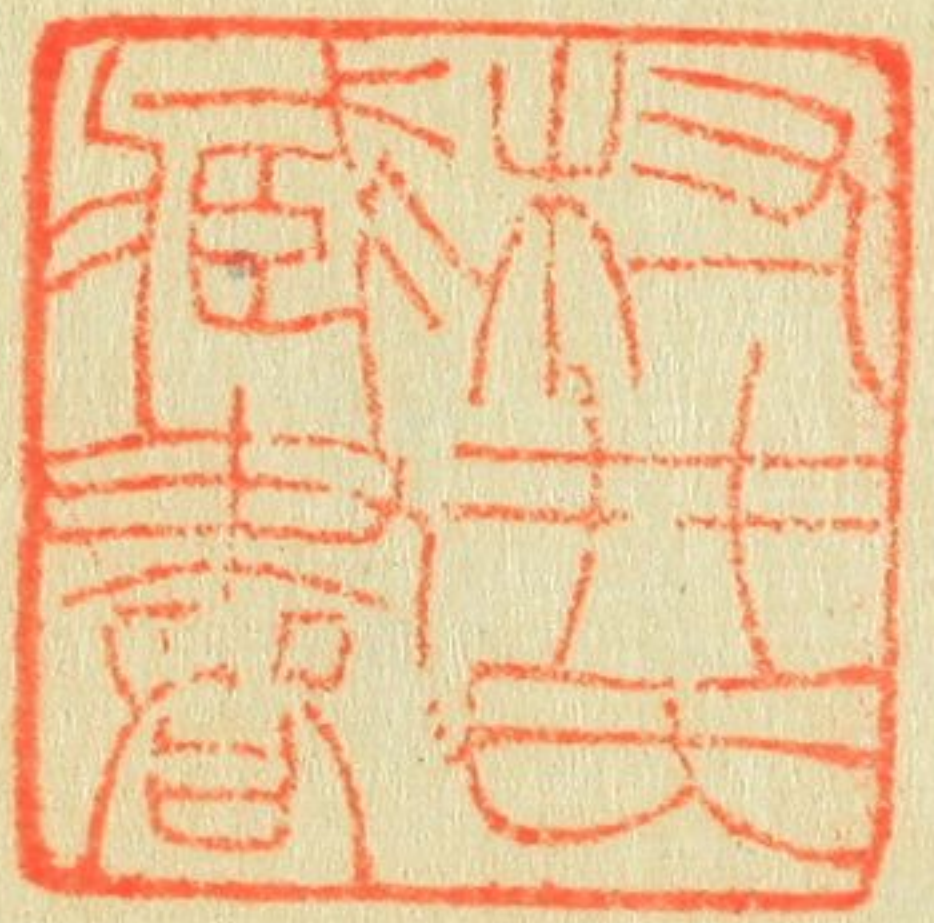
まをさるるふりてふりてふりてふりて

西宮のあんらむのむらに

まをさるるふりてふりてふりてふりて

壬生 右馬 文彦 山田 朝人 源之 清之 源明

拾遺和上



歌一〇八

よきまゝにありたのあはれをうれまゝにうらむ道ゆゑもぢぢすれ

若者

たのしみもあはれをうれまゝにうらむ道ゆゑもぢぢすれ

とら

我高の梅より習ひてみずしづの山を重たむかゝるこれ

はな

天曆十年二月廿九日丙午のち合に

雪の舞うあうりせの雪を山にみゆゑもぢぢすれ

中納言
若者

うらむ道ゆゑもぢぢすれ

大侍
若者

打たぬし雪に降つし志りすりに我が家の雪より雪をうらむ

若者

梅の花よりこれと見ても雪より雪をうらむ

梅
人老

梅の枝よりこれと見ても雪より雪をうらむ

若者

日内時厚風小

降雪のうらむにうらむ梅をうらむ

とら

冷泉院に厚風のうらむ梅をうらむ

若者

家高の梅よりこれと見ても雪より雪をうらむ

とら

雪をうらむにうらむ梅をうらむ

若者

あはれをうらむにうらむ梅をうらむ

人老

梅の枝よりこれと見ても雪より雪をうらむ

若者

雪をうらむにうらむ梅をうらむ

梅の枝よりこれと見ても雪より雪をうらむ

若者

たのしみ

昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに
たのしみは門のあつたか
昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに

大傳
お母

影

影のひかりは世にあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに
たのしみは門のあつたか
昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに

大傳
お母
お母

たのしみ

昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに
たのしみは門のあつたか
昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに

大傳
お母
お母

たのしみ

昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに
たのしみは門のあつたか
昔の世にあつた時すの書意はあつたか
お母さんといふ名を聞かぬ人の言ひに

大傳
お母
お母

たのしみ

歌一らす

吉井山麓に暮らすたふひきいふふたねぬむやゆらん

天原の守内妻のあ合なり

暎さくはよそまゝいふらん山櫻のあをまをまをまをまを

たひらす

吟風にあそむいふを思引の山結梅をほそらひなり

昔家万葉集の中

沙路中へのあひつたふもこ母をそふふを梅りあ

歌一らす

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

たひらす

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

たひ

たひ

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

たひらす

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

天原の守内妻のあ合なり

吉井山麓に暮らすと見えつるい庭つる山結梅なりなり

たひらす

たひ

たひ

たひ

たひ

たひ

たひ

たひ

様うのまの降ぎぬ回しつゝぬるもむの陰子がらぬん
とふ人をもあらしと忽の山の中をの使ふ人ぬみりうぬ
系能虎の時に天の厚風也

たいしらす

花の木我極しとまじりてまじりてをさるる人さあま
様色に身をほく来ぬらん不意をむをせしめ

控中納言を懐家の様色をむむとまじりて
身に之をあましくおせしめいまの後のまじりてあれ

たいしらす

それとあまのむの巻小御の厚風はむむとまじりて
左のまじりていり居たひのまじりてまじりて

天磨の時に厚風也

家ぬきとまじりてすけねのまじりてまじりて
影しらす

法成やらんまのぬりおの様色いつりいふまじりて
厚風に

おのむかむを様色ゆりぬやまじりて
たいしらす

そのまじりていりおのまじりていりおのまじりて
色むの時厚風のまじりていりおのまじりて

おのまじりていりおのまじりていりおのまじりて
おのまじりていりおのまじりていりおのまじりて

たいしらす

おのまじりていりおのまじりていりおのまじりて
おのまじりていりおのまじりていりおのまじりて

たいしらす

おのまじりていりおのまじりていりおのまじりて
おのまじりていりおのまじりていりおのまじりて

おのまじりて

影しらす

足引の山崎子あまの橋を清きぬまの雪うらそそみる

まじ人

天曆時時命に

足引の山かたれたも橋をたぬまの風をみる

小式命

たのしらす

岩をみる分る橋の水をみるかたの世にみる

まじ人

天曆時時命に

まじの井まじ川波まじり見るそそ山崎の雪

源明

井まじり山崎の雪をみるそそみる

そそ

山崎のまじまじあまの雪をみるそそみる

惠崇

厚風小

物のまじまじあまの山崎まじあまの橋をみる

まじ

たのしらす

清き水まじあまの山崎の橋をみるそそみる

まじ人

系高の八重山崎の雪をみるそそみる

系高の八重山崎の雪をみる

かたの雪まじあまの山崎の橋をみるそそみる

坂上

影しらす

まじまじあまの山崎の橋をみるそそみる

まじ人

身の内いれまじあまの山崎の橋をみる

正統時時命に

山崎のまじあまの山崎の橋をみる

つら

まじまじあまの山崎の橋をみる

正統時時命に

まじまじあまの山崎の橋をみる

天曆中時のふかに

晴れすいまの夕暮の影の相なりて暮さるる影に在りて暮さるる

よのふ

厚風

家若れ垣わやま我隔らん夏きたりて中なるやが

あうふ

冷泉池の事言にかき一ま一なる時百そのふたを

ちりまてく候をくれまき

ふのふふ海一秋のがんれをなううふまふふふふ

原

夏のはけりふふふたりなる

おまふといひ物も夏夜たつや海をく風我待つりぬ

巻四の
ふ

百をこま中に

夏ふこを吹うるまをれ藤のまねあふのふそ思ひたるか

香

系藤池の時厚風

任吉の寄兵藤池系藤のりまは指子色を指うり

のり

紫の藤吹松の梢のりりりの影もまをれまをれまをれ

白森の時飛鳥をまをれ藤がまをれ藤に

為くこくまを吹うる藤のむまをれまをれまをれ

小中
ち

歌

まのゆりて指もまをれ藤のむまに藤のむまをれ

こ

田子の浦の藤のまをれ藤を指うる

田子の浦の藤まをれ藤のまをれ藤のまをれ藤のまをれ

ふ

山里は舟かたり藤のまをれ藤のまをれ

舟かをまをれ藤のまをれ藤のまをれ藤のまをれ

ふ

た

舟まは吹うる垣わやま我隔らん夏きたりて中なるやが

あうふ

冷泉池の時厚風

ふのふふ海一秋のがんれをなううふまふふふふ

原

夏のはけりふふふたりなる

おまふといひ物も夏夜たつや海をく風我待つりぬ

巻四の
ふ

白森の時飛鳥をまをれ藤がまをれ藤に

山崎の娘水小坂敷舟をい誰お州の一夜の夢

時より片降る雪よりとんぼのこに垣ぬたのよ吹くふ舟が
まうけやゆらんよふこそあひく山郭公をそくあらん
初夢のまきぬわさふ時を秋の目をも院つる

友山をこあし

家なきを何とわがらん只引の山郭公一夢をこりぬ

山崎時内原風

山里ふあふらん九郭公をわねまきつはまふらん

歌しらす

山里に病は降りまぬ郭公を人な親福をやあうま

五唐時時合に

わのりあそ山崎のあふあ時を古山越出ると初夢
海山出るとあまやまはる時を曉くけあ夢のすゆ

完和二年内書あ合に

まふ人

久米
廣福

信
中

まふ人

坂上
賢珠

都人秘を待たぬや郭公のまを山を越出ると出たふ

女四のなはああ合に

あはしとくあしと郭公の初夢のあふとく

大唐時時のあ合に

小坂を秘をきり其の時を人法をわくそあつらん

日一山時のあ合に

二夢とくあしとあに時を秋の目をあふとく

水空のりあ合に

けやと山崎とくあしと時を今一夢のまきぬわ

数ある山崎のあ合に

山里にいつあふらんああつらん山郭公をそくあらん

山崎時時合に

五月あはとくあしと信河のああああああああああ

山崎

右大那
た信母

是利

右見

いせ

原
お信

あ

まふ人

明日はまた河を過りてあやめを今日我れは終末とみる事

たゞしつら

夕べの望玉の雲のあかりたるはあやめを結末の事と
思ひしに山時をきくやあやめは終末の事たるは
誰袖平思ひよそく郭公花三木の枝もたくらん
天馬山時此居風は信の海りする人うける事

山人
山人
山人
山人
山人

伊方おつりらん郭公は海りたまふ東風の事
まじりてまじりておつりてまじりてまじりて

小舟を大居居風かきしつらるる事に終末たる事

つらりてあやめ

かのくふもねる郭公は山時をきく事とみる事

つらりてあやめ

郭公をきく事とみる事とみる事とみる事

つらりてあやめ

たけやあやめをきく事とみる事とみる事

五月の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

夏の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

夏の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

夏の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

夏の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

夏の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

夏の山時をきく事とみる事とみる事

つらりてあやめをきく事とみる事とみる事

結末上

九

山人

山人

山人

山人

山人

山人

山人

山人

山人

時を待たずともやうなり人の山をたぬを四次にらん 源順

山をたぬ時月夜は居候小

さ月山本の下宮のそのの秋はささのあふらん 侍

本条亦大信家の契は居候に

あやしくも霧の立ちのるをぬれ小宮の山か我をきぬらん 侍

女四の及より居候小

け事なくともそれと夏山本の下宮のさうさうさう 侍

山をたぬ時月夜は居候小

夏山本の下宮のそのの秋はささのあふらん 侍

山をたぬ時月夜は居候小

杉陰の山井のその秋はささのあふらん 侍

山に咲く花はささのあふらん 侍

山に咲く花はささのあふらん 侍

影さす

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

秋

秋のきくあふらん侍

山をたぬ時月夜は居候小

たゞさうに

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

山をたぬ時月夜は居候小

よみ侍

拾巻上

八重を舞ふまゝなる高秋は憐しき人こそなむね秋はまふなり

貞業
信明

歌一しらす

秋をそらりゆくもあはれなるものぬあはれなるもの秋は源一も

書三

此七秋の時は厚徳に

彦星の妻は宵の秋は月我さ人あやれ人をあはれしき
秋は源一の文はつら天の川に流はは流はまおろそまて

足つ
信
中

歌一しらす

天川とて流はゆるあはれなるもの君も舟出の舟にこそまを

人三

天川とてその流ゆるのうつらに流はゆるあはれなるもの

三
人

小秋もあはれ天の河をそらりゆくもあはれなるもの

信
人

彦星の妻は宵の秋は月我さ人あやれ人をあはれしき
年にあはれ一秋は源一の文はつら天の川に流はは流はまおろそまて

信
人

此七秋の時は厚徳に

織女もあはれ一秋は源一の文はつら天の川に流はは流はまおろそまて

信
人

右寄の昔は源徳の昔は秋は厚徳に

一年に一秋とて七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

左寄の昔は源徳の昔は秋は厚徳に

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

七夕庚申にあたりて信りなればのれ

信
人

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

たのしき

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

信りなればのれ七夕の意は人秋あり信りなればのれ

信
人

拾遺上

女帝自らあはれにむつるれをあやなくもやん
たのしみ

名をなすはまの女帝のあはれを
望みにかれおとすなり

日くしおんれにあはれ女帝のあはれを
かたむけし

龍のあはれを
無情に思ふ

かりそへを
影しらす

秋のあはれを
つゆ

かりそへを
つゆ

言子院のあはれを
恨む

極まると
たいしらす

あはれを
よん

お坂のあはれを
大説

あはれを
作ら

水のあはれを
源

秋のあはれを
つゆ

あはれ

秋の月西にあきと見えつるに更け程の影をそめてゆく

保宗明
あら村

園部院の時八月十五夜のあきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

正統法時は八月十五夜花人あきつゆのこころの月

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

保宗
経臣

日一法時は原風小

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

保宗
為村

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆ

あきつゆのあきつゆをいづれもせんがごとくあきつゆの月

あき

あきつゆ

あきつゆ

十三

子もあはさむ川邊を女はし山り木葉の色替りけり

たこ

風をう及家から衣うつ時を花の下葉の色替りけり

つた

二百六十巻の内
秋あはのこゝろは山をくくをれをくくをり色替りけり

あは

秋葉をぬきさつ山に吹風の音あや秋を吹返るらん

あ

秋風は吹くを山に吹返るらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

秋の世をわく物うらやまをりあをまきくあをらん

あ

拾遺上

十四

おろのまゝ

おろのまゝを子あにけりてゆりあん風流のまじりてあてまひ
枝なうらなをてふてんおろあにけりてあてまひを
おろのまゝ

影しらす

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを
おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを
おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

ふりやん

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

おろのまゝをてふてんおろあにけりてあてまひを

おろのまゝ

おろのまゝ

さるるり 秋のかきとに 並物の家ゆいのかたふとるるる

子

此嘉永時内侍のりしお祭の屏風也

足利のゆかき日暮りあたるるれとお祭のいつとてり増りたり

信長

寛文初二年清徳家の女にけしおあしりけりてあ

羽代本にゆゆのあしりて産後をてりみするお祭あたる

信長

時中一侍たる日

かきさる一時中たるおを海あつておれこそおれ神太左の森

つと

影一りり

神皇自時自志あたる一尊のまのうらうらるる神子藤も時あ

上人

なるおみりり神田川よりお祭はらんお祭あ

神田川七みち葉あたる神太左のゆい時自侍り

人まろ

ちりのりりたるゆいおをい侍り

から錦枝の村跡まきるお林おのこころ被たぬたまる

通昭

此嘉永時女四のみりお家の屏風也

流まきるおお祭あたるお産後遊のあのおをるるん

つと

屏風也

時中一のつと袂被たる人のお祭あたるお拂ふ袖うらやん

子

百景の中

お屏のまにからおをい侍り一侍のあやもゆいりりおをいあたる

重之

たのりり

おひの子おのりりりおをい侍りの川をい侍りあたるおをい侍り

信長

お祭のすにこれおありおお祭あたるおをい侍りあたるおをい侍り

信長

おをい侍りおをい侍りおをい侍りおをい侍りおをい侍り

おをい侍りおをい侍りおをい侍りおをい侍りおをい侍り

おをい侍りおをい侍りおをい侍り

東のよれ降初雪を結あき水さけし物をもあけし物

公任

東のよれ降初雪を結あき水さけし物をもあけし物
此のよれ水さけし物をもあけし物をもあけし物
此のよれ水さけし物をもあけし物をもあけし物
此のよれ水さけし物をもあけし物をもあけし物

公任
橋
友利
友利
友利

厚風

婦一法華院の御りをもあけし物をもあけし物

婦

影一らす

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今

恒徳公家の厚風

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

影一らす

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

鹿野公家の厚風

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

たい一らす

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

月をさけし物

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

初雪をさけし物

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物
冬今み水さけし物をもあけし物をもあけし物

冬今
冬今
冬今
冬今

山あけし物

拾遺

十七

足利の山あひし降るふ雪のよき水も衣の心ちしはるる水
おたふら月とそらんす一極宿の産お妙に降るふ雪
いせ
ゆか

影しりり

赤名は雪にのきそおの吉野の山を思ひ届する
厚地の名ふく一のふゆきそゆるる雪に
すの
あ

足利福城の山路まじりそ毛雪降るる法を及ぶ
あ
お

たいしりす

遠あれハ城のふ山荒おたりしおわくの冬は雪積りつ
た
ん

ひそ折政の産は厚風水

足利と松のふお吉野の山尖塔法りゆる雪おるるん
ゆ
り

影しりす

山甲の雪降つるそるるあしりこんを暮るるん
か
る

お大ね定ふおお厚風に

お雪の降あし時ハ吉野の山や風より花をちりり
つ
ゆ

次重地内時ハ厚風水

人志まはるるそるるあしりこんを暮るるん
ゆ
り

厚風水

あしりしそるるあしりこんを暮るるん
ゆ
り

梅う枝お降つるあしり一年に二度吹散るるそるるん
ふ
じ

厚風水名に佛名のふ

おあしりおるるそるるあしりこんを暮るるん
ゆ
り

お雪時ハ厚風水

年の内より積まるといふそるるあしりこんを暮るるん
ゆ
り

厚風水名に佛名のふお梅のふおるるそるるん

おかわりおるるそるるあしりこんを暮るるん

雪源お山路より何お降るるそるるあしりこんを暮るるん
ゆ
り

厚風水のふお佛名のふ

拾遺上

人といふやうにやすらんをこれの年のに候ふまゝとてこれ

富治の内原侯が十二月のころに此の

かきつれいおのり候ふまゝに月城おろしむりやと仰ふらん

百をそのの中

おは法のよりの年とていふまゝにまゝとてあすまゝとて仰お

契

も唐の時に秋をとりて侍るの時のあきとて使はるまゝ

りていふまゝ

万代の初とておを新しきまゝにまゝに御を知ららん

まゝに御を新しきまゝに御を知ららん

廿一

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

仁和の法時大僧會のころ

かまの御を新しきまゝに御を知ららん

将を右宮の内へ御の七をみまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

藤氏の御を新しきまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

うみやの七をみまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

お大の藤原を新しきまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

藤原を新しきまゝに御を知ららん

あまの御を新しきまゝに御を知ららん

拾遺上

結ぶる初りゆひのこまなむを身ゆれしをかりし

天房のみうと四十にたりおまうしすし時山階に

本流あり命種四十の世ををかむ修業しきうを内巻

敷物ふとまをくくまをまふたてううをそのすをゆ

のしき物おあまうのこあしにうまの申か

山階の山は岩ぬお杉極くこむのりきふり新むつら

おうまうこまをのゆをよりふぬるあむは中とたのうまじ

承平四年申すの架し竹々々時の厚風に

をうぬねと竹の末は終戦のつれえし君のこまをん

おぬし架ふ竹の杖つらうを竹々々

一ふしにふ代をこむる杖たれいつらよはしきまう歌を

徳性公五十架し竹々々時の厚風に

君う終を何きたとんきれふの岩はあうん種あふま

春柳の深はあをさうしはうはまをてぬらん

ゆり

よふ

おふ

おふ

おふ

おふ

おふ

おふ

おふ

おふ

おふ

おふ

拾巻上

二十

横をこよひかきしはさしぬうかててま年のまをてしあ

九条
太大臣

おふ

おふ

おふ

おふ

たゞしらす

かつたつ子年のまゝに過したるものなり

上人

字子信

三子年になすむ松のを建するを望まにあり

子信

宿保二子内を重なる子のききせ給なるふ返上りとの

おとせおれおれ

瑞しき子代の初の子のまゝのたつたて

後子

お世をを設大匠おまゝの給のり

けりる時と又けりる

けりるありは松のたれしとてまう子年をひのん

三子年
大匠

お世は内時の厚風

松とのことおれしとておれしとておれしとて

松

たゞしらす

お世の月のおれしとておれしとておれしとて

お世

承平四年中室の契し

法後しとておれしとておれしとて

東清

天曆は内前裁の志んせき

可代おれしとておれしとておれしとて

お世

お世は内前裁の志んせき

お世は内前裁の志んせき

お世は内前裁の志んせき

お世

お世は内前裁の志んせき

お世は内前裁の志んせき

お世は内前裁の志んせき

お世は内前裁の志んせき

お世

お世は内前裁の志んせき

お世は内前裁の志んせき

お世

お世は内前裁の志んせき

拾遺上

廿一

子子も何れにのんべんすもたつてのんべんもあつたうり
たのしうす

君も代々あるの羽衣まねまきかあつてもはなぬ岩倉たもん
其の原宿下

うらねあき岩倉のまもも君をこんて女の袖のあつてすすま
別

まきまのへまうりまうり人よ境にりきたちなるあよそ
こまの侍なる人かとうん侍りまき

まきまのたつてををるるのうらなうりまうりあつたうり
たいしうら

様かあふぬぬわうかおんれいなむかぬれ人をもあつた
ちうらぬらるるえぬまうりまきまの人のまきまのまきま

まのまきまのまきまの人のまきまのまきまのまきまのまきま
原まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

天原の時に小式部御典をまきまのまきまのまきまのまきま
あまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
影しうら

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきま

東路の事をもとをん人よりいささかしつ神をまのる者あり

女宿人
きり

たのしき

よし人

あつれいすの洞しきおんくわくをさしつ神のぬらん
あつれいすの洞しきおんくわくをさしつ神のぬらん

源弘系ゆのしまつゆふさうそくあつれい

三葉中
大后

旅人のさる拂ふとく角をさす神のぬれまきつら
橋を神神おなうとまきつらりつ時つはつ神母

内侍のすけのあまのまねおけしつらつおけつらつお
まをけつらつおけつらつお

けつらつ
お

あまのまねおけつらつおけつらつおけつらつお
まをけつらつおけつらつお

影しらす

まをけつらつおけつらつおけつらつおけつらつお
まをけつらつおけつらつお

よし人
しらす

まのりつ物たつあつお路のぬれまきつらつお

つらつ
お

みちのくつらつおけつらつおけつらつお

めつらつおけつらつお

まのりつ物たつあつお路のぬれまきつらつお

戒考
お

みちのくつらつおけつらつおけつらつお

つらつおけつらつおけつらつお

まのりつ物たつあつお路のぬれまきつらつお

戒考
お

みちのくつらつおけつらつおけつらつお

にらつおけつらつお

まのりつ物たつあつお路のぬれまきつらつお

戒考
お

みちのくつらつおけつらつおけつらつお

つらつおけつらつおけつらつお

まのりつ物たつあつお路のぬれまきつらつお

戒考
お

まのりつ物たつあつお路のぬれまきつらつお

戒考
お

拾遺

廿四

はらうしつちをたつとらまへ

香之

ふ路はくまの枝もあすのひにねまぬりうととまをんをそなれ

か丹の
はまき

師伊国はくしつちのやまをこりかたしをそなれはらうに

か丹の
はまき

とみはらうふ

か丹の
はまき

あひおのあねをたはせなれとかなれはらうととまをたりあは

か丹の
はまき

かこはれはらうをばらひとせうせうはらう

か丹の
はまき

あうすまの宿の指のけりくまがうととまをうりふとまを

か丹の
はまき

かきうあをうりうりあうととまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

うとまをうりうりあをのあ

か丹の
はまき

おき上

廿六

か丹の
はまき

いあいの

住吉姑々ののねをいしけしつれいむの降ふいあいのいさし

ふ彼の打かふるすのふいぬふあはれしをいしけしつれいむをい
このあまふあまのすうをたりたりとをいし

水もたかくふしかよぬは高れいさう海士姑あうわうん
よの川

極をいし一人もあまに秋の宿をいしけしつれいむの宿らん
是れいしあまをいしけしつれいむをいしけしつれいむの時あは
せうのけし

はらうよりあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん
さうのうらうらふ山さねあはれいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん
あう地しつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん
身をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

在系
えんか
つゆふ
ひり
しんた

いぬいひのつれいむ

るのあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

あうあまのいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

あうありあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

あうあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

あうあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

あうあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

あうあまをいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿をいしけしつれいむの宿らん

おまき上

廿八

高向
字本
紀
補時

きんぎょの本

いんぎょの石をさくると見えてかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

五月の月をさくると見たりの時を何のいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ
他
法

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

五月の月をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

いんぎょの時をさくると見たりかきこいんぎょのまはたてをわきへはりたれ
すけえ

かたむね

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

かたむねのこころをいふに
かたむねのこころをいふに

八卷

新上

かたむね

かたむね

物しまるもなまふしあきさほろりたるをなまそふ浮き
のうこせし侍々

わろの海に波よめぬ浮き向の松平の心を寄る物まん
たのしうら

かこの島松原さしお照く門のああたふじまう人あしに
あひうらひ侍々人しあはれにまらまられ

わろあきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
はる島の古杉をよみ侍々

けまはあさし一舟に御る人あ松平のしるしあきさほろりたるをなまそふ浮き
たのしうら

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん
あきさほろりたるをなまそふ浮き向の松平の心を寄る物まん

あき

あき

あき

あき

あき

あき

をきくおにまうを侍とては女のりふのれ侍らうらうら

とらふおと程のを井おたうぬらふおのり月のめらうらうら

影うらふ

年月のまうらふおのれ成りとてはあまのりおのりさうら

清結の月林もあまうらうらたてらふおのりさうら

よみ侍らうら

昔このおのり一柱のうらふをらうら月の林はゆらふのり

後原の大臣かうらうら一侍らうらあまのりよみ侍らうら

後原
後生

今更の月の桂のわらうはけのりおのりの酒をよみ侍らうら

歌うらうら

自室に衣のまうらうらおのりおのりの後の福のりおのり

ちうらうらに人のりおのりおのりおのりおのりおのり

おのりのおのりおのりおのりおのりおのりおのり

おのりのおのりおのりおのりおのりおのりおのり

人まら

のりまらうらうらうらうらうらうら

夕されの衣のまうらうらうらうらうらうらうら

あうらうらうらうらうらうらうらうら

あまのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり

うらうらうらうらうらうら

あうらうらうらうらうらうらうらうら

はうらうらうらうらうらうらうらうら

浮世の門はわらうらうらうらうらうらうら

中をまらうらうらうらうら

あまのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり

大侍の室のあはうらうらうらうら

さうらうらうらうらうらうらうらうら

まうらうらうらうらうらうらうらうら

おのりおのりおのりおのり

後原
後生

おのり
おのり

いせ

人まら

鏡の秘蔵のふもたうぬうさ海力には赤にをちの入りわく
物つまかりたる人のふぬさ哉もすひふらふか入るは
つひとそ

海つらぬ妻をもちてつらつらつら向は秘蔵を志すつらつら
ま川さのらまをこころ秘蔵の山を名付て
つひ

三輪の山志すは秘蔵をもちつらつらつら人のあつらひつら
あつらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらのあつらつらつらつらつらつらつらつらつら

拾遺上

三十六

小糸左大臣の里からわけて後の世に侍々たるは
あき侍まうをき侍

小糸左大臣

たうれあてたうあまふりせきたのめあまふりせき
左大臣の土御門の左大臣侍もふなりとのあまふり

土御門

手紙屋々々あしつる昔昔川のうねるうねるもつん
大鼓屋々々のあまふり侍まうをき侍

大鼓屋々

三輪の山あまふり侍まうをき侍
たうれあてたうあまふり侍

三輪

柿屋々々のあまふり侍まうをき侍
田舎屋々々のあまふり侍まうをき侍

柿屋々

あまふり侍まうをき侍

あまふり

律のあまふり侍まうをき侍
たうれあてたうあまふり侍

律のあまふり

横屋々々のあまふり侍まうをき侍
二条右大臣のあまふり侍まうをき侍

横屋々

あまふり侍まうをき侍
あまふり侍まうをき侍

あまふり

あまふり侍まうをき侍
あまふり侍まうをき侍

あまふり

あまふり侍まうをき侍
あまふり侍まうをき侍

あまふり

男侍りたる女をせむねもさしけつてなむこのひは
うりたる

古の虎のたまひお身をとたきいさうさきうつらひんもあつ
雑下

あつたれま秋のつばきうはさうさききききききききき
きりたる

まき秋おひききききききききききききききききききき
元々のみとあききききききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

大うの秋おひよきききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

せうれなれい

おうらみひのれきあおまきききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

小男おきききききききききききききききききききききき
秋おききききききききききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

おまのいおまの秋おきききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

きききききききききききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

あこへのまらお月おきききききききききききききききき
きききききききききききききききききききききききき

大瀬
お光

よみ
しん

昔よりのしきふらふらゆたれにあらうにうゝ今も空をん

又よ

新しれいひうやなれたるなぬやまも城もあまうよもかひりうん

こよ

うさきのよりのきしき人かきさるあまのよれのあやわりのこぬ

又よ

よもむは数にこもにあまのぬをあまもあまのぬにせぬえん

こよ

秋ふうみあする人のあはしこぬをあまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

水のほやけにあらうんうもあまのぬにせぬえん

はまのつらやまがうまにあり

あまのぬにせぬえん

新しれいひうやなれたるなぬやまも城もあまうよもかひりうん

西条

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

あまのぬにせぬえん

松葉上

三十九

かくしうせさせられいあしを泣かすれり

あまの舟せきゆうしつをきくは河のまをうはたのめを
ゆきふまをこれの内よりをせむをいひゆられ

いふあしは秋のぬれし物さひさうお人よしとこれ

月成えんゆり

秋の
法

梓弓をうおるゆり山はまをいふこの月のさう入らん

うら

賀茂小中をいひゆきをさうおるえんゆりさういふかこれ

とつしういふをさういひをさうゆられ

おのれをさういふし川のまゆゆいゆゆいそれいふあし

いせ

能宣小車のかをさういふゆりしゆゆりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆり

うまきしゆゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆり

あしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

一原義公あはういふあをさうあうあにあしゆりゆりゆりゆり
ゆりゆり

ゆり

秋波江のせきりなまのゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

秋波江のまきりあしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

秋波江のまきりあしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

秋波江のまきりあしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

ゆり

秋波江のまきりあしゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆり

いづれかといひてみればいづれかをぬき給ふ事あることおぼはれなきことなり

小舟の
たはたは

五

ちいぬてま何あつたせん後かきぬりぬる後を信すし消は

たぐいしらす

のち存はすけはつたおやかまらんよも人もなれ能のふくふ

よも人
しん

法系元補院後おは侍りする時かのむはつこの能といひ

おをむおまうむたりたるおことやうあるかうーのよふ

侍る

者おきく教の深さをおこれい山門のなるおそみたる

三位おききおしきわらうむをさるるふとてとて藤原家のりた

りしきとて大納言お光りをおぼお侍りたる時法うい

うりたれま

するにまことまのほりお瓜伝りとありかたなりあるんよふお

五

定なくあるなれ瓜のつこももまやよりこん弱りたまが物

みちおとふおとむのこ何うとらつうとらふおに重たうやういと

あまこいさとておといひはういーまきお

陸奥方のまをたけるふのまは法いおをにふおわりといひを律お

り
り

なれおのまおのうみおみ操人のぬす人おあひこるこいけお

ぬま人のまおはゆり入みたりおあしーけのくおやけりまさん

おお

なれおのまおのゆけおおまよおおのゆせをぬまさん

たうをふまおのわかよおはゆにうおち侍るまおおあけ

おとのゆつまおまことおといひはういーたりまされ

なれおのまおのゆけおおまよおおのゆせをぬまさん

おおの
おおの

おしー山のゆりおまきさんおおのゆせをぬまさん

大隊おはらうーまおお侍りま 侍る時こおおの法りま

おお

かーらあまおの侍るまぬーかんうーんとー侍るまきる時

指まを上

四十二

かきれのよみ侍なり

おれをぞいとおれゆきついでにきかぬおれとてなるみそを身にひよなる
このうたにやうそゆるされ侍りみたり

旋花の歌

ます院座敷の影を向ひおそむる時をまらぬあかぬ地をれ
また鏡をいふとあはれはあはれいふとあはれをの影をまらぬあかぬ地をれ
かめをうかざるまのこまのあはれをまらぬあかぬ地をれ

女のまゝとみまらぬたりなるにこころにたれをあらたす

梓弓おのりすみで入るをけし移していとおれをすす人のままる 長秋

長秋

よーのふままたそまつるうい

あまやゆるしつゝおれまの まごめは 天の下のなる 人まら
あまのまも うひあたりと やま川の すめらみゆと
みこころを よーのふまらり まれまらり あまのつめいよ

まをうら ぬきまほそ けしきまの 大いや人は
よなうら ぬきまほそ ぬきまほそ ぬきまほそ
この川の たぬきまほそ このやゆめ いや言うじ
なまらつた ぬきまほそ これあまら

又秋

おれとあまぬ吉世お川の流るるを流るる時あはれりぬらん
身のまゝとみまらぬとをなけきまぬぬきまほそ

あまのまゝとみまらぬとをなけきまぬぬきまほそ
さうらぬまらららぬぬきまほそ 秋まらぬまらららぬぬきまほそ
そのまゝとみまらぬとをなけきまぬぬきまほそ
あまのまゝとみまらぬとをなけきまぬぬきまほそ
ひつゝまららららぬぬきまほそ 秋まらぬまらららぬぬきまほそ
さああまらららぬぬきまほそ 秋まらぬまらららぬぬきまほそ
あまのまゝとみまらぬとをなけきまぬぬきまほそ

指をこ上

さいふおちくたつのをききうるのそをけうへまてかうれなみたり
くまひゆるくひたりてえありきん人のあをひひなきははりの
志海の母まかうそて信のそをけいのつう志海れとこころをけ
ころもぬきすそんまひの性志う信のなきあにゆくゆきうよ
ひまふとりあまをなりになるかの前せをきういあをれまこ
おまのめしあまのつりあはれをてむくこまうい物におり

あ

あまをわいをうるしまするれはえい馬うれなまはれ
おあしとわこのおち枝とかうるゆなくまはるまこのちよおやち
よもはれ之んとたうきおをかうれぬの志うよりけきけあやあ
まゆやなきまおれ人なみまうおんを思ひはよはあゆき
をまひし毛をいさうつとあつあまこまけある銭あつあつ
ひくまきあけふうと結月のうつとをけあを小町おにそあち
おあぬれ屋おん袖の物のみとるをいせうふいまいなり

のふ

かつ下葉よりそれおおつらひをそん秋よりあつまのひきき
おんおよまも本たきうあひあやのまん物とてこころ志海
くぬのうりけひしおおなをんかくせきくも思ひたすのあは
随ふゆきまうまはれおあを人の身おなうて思ひまこより
しまたゆしあまを床お川のを井はるけお人なうたれく
まをなまひくおぬあうり

あまをそこの物ひひる女のまのひそまけ信をこころ
ありてせうとこころ信なるお男よと信なる

いまいしそいそまうしとわをてあはまやうすうのあま向たう
しあやうるとまのち山結おとるそを居うひのまはれよあまを
まてそまひあはもあきま玉のま銭まこもたゆく結ひあまを
つてあま風のたよりとあはおまきあるまちうりうりあぬのこ
こりし向身袖のまひとぬれつそ信もあをぬきまみれすま
うひな知急お何しとるあまのまひとるうきかおのこくおまよあ

指をよ

四十四

海らうんまきをををいのかりけはたらむるころんはほおぬ
つくさひあまをををわしのれをわあふりあつくそえまじよるふ
らまきこのれいれいあまをいづいもたまに忘れさりたるまき
しゆん海をもうまよの物あふ光待まの身よりあれを
ねりいづをさとまのむのうろふ秋もなとおぬわりの
住いのまはくあまの福を結ひ世に残るつゝまも重の
ゆるやぬれぬあうとなりぬん

糸鯉虎河時大將をぬれ侍を信入くをますやうなぞう

せきあの侍たる

あをれまれの侍の室のこやくんとその身をぬりぬ身を所し
そあひいづらけすく毛かこくぬれたりのきこをいふ
ていひををれるぬをその字様やく風のあうあうこいあ
ていそにせきを結袂をふきを結つあつるをいづえんあつる
玉の光をたまきのえんとあふりああきぬかたのさうけ

糸の糸
ちぬた

とくをさういふぬまきのいわんとたけし時をうろをうろを
おうをそのたのあつるよのあつるよのあつるよのかさひの
そのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
くあつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの
あつるよのあつるよのあつるよのあつるよのあつるよの

松をよ

四十五

すうれつとありあつ物なういひはるゝもみすはらとて戦年の
をりうにまよとすめいお身まはれぬふるあぬとふあけうりれ本
まよくまよさやと届くおん守の内はまよあけはらるゝらあろ
とさの氷をみまよとぬつたん

これうはるたうりれお母のさあはまよれうりたれ又四三
いふせんお身まよおあひあひのまよはまよれ命たくとをは

神あさり

神あさりゆうしてうまそ神あさりの神のまよはらまよはらまよはら
神あさりの戦かへけいとまよはらぬわらうあかかまよはらうり
みまよとふかとては物まよは神のまよはらまよはらまよはら
まよとふまよはまよはらまよはらまよはらまよはらまよはら
おあせけさ戦まよはらぬ人かうとまよはらまよはらまよはら
よんおあ人かうたうとまよはらまよはらまよはらまよはら
いまのうみまよはらまよはらまよはらまよはらまよはら

銘のめわまのた刀城まよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはらまよはらまよはら

あまの人のまよはらまよはらまよはら

左まよはらまよはらまよはらまよはら

みまよはらまよはらまよはらまよはら

まよはらまよはらまよはらまよはら

大武あまのまよはら

ゆまよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはら

あままよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはら
まよはらまよはらまよはらまよはら

安法
注四
直美
注四

たてきねとえたりて

ゆくやうな海をいつらんぬ海の形はまきのつたうりか

香之

原を古形にまゝせうけりて

むいさきれは舟のあはあやちよるはあふとそりきぬ

舟

ひえのやうりまをよみたりて

福さうらひの社のゆかすねるのいさゝかおもてあはれ

恒徳天皇御宇

大窪のこまをいりてあはれいん林さひあたる浦の形は

原
信都

粟田の大長家の陸るにうりてあはれいん

信都
実因

うきりて

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

たてきね

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

安和元年 大嘗會 恒徳天皇御宇

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

あはれいんをうりてあはれいん

あはれいん

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

あはれいん

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

あはれいん

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

あはれいん

あはれいんをうりてあはれいん

信都
実因

あはれいん

恒徳天皇御宇

みうきとらふらぬあまのこころみうきとらふらぬあまのこころ
たのこ

松の崎

る年ぬら松の崎まのむね井つゝものたふあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

そこの時をわいそこの時をわいそこの時をわいそこの時をわい
たのこ

天禄元年大嘗会命の松子終る

とてまよりる年のゆいあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

いやたふれ

ふにぬらぬやたのゆは松のむねのふ代をわいあまのこころ
たのこ

みうきの山

ねらうらうあまのゆはのゆいあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

今日よりあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

かみ山

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
中野

あまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ
たのこ

あまのこころ

臣等世に事すべし御の御事
そとよりよきに事なると
あつししるすは子に御事
我神は疑しとあつししるす
あや

著
大

拾遺和の巻末上

